

「あんなに出したのに、もうこんなに硬くしちゃって。いやらしいんだから」

自分から誘っておいてそんなふうになるのは身勝手だと思いつつ、文字通り急所を握られた状態では抗^{あらが}えるはずがない。女芯からこぼれる蜜液が陰囊^{いんのう}を温かく濡らしている。彼女も激しく昂^{たかぶ}っているのは間違いない。

恵はカウパー腺液の滲む頭部にさらに唾液を垂らし、ヌルヌルと潤滑した。龟头が妖しい光を帯びる。自分のものなのに、自分のものではないように見えた。

「勇希君のオチン×ン、オマ×コに入れてあげるね」

腰をあげ、聳^{そび}え立つ器官を逆手で握って自身の真下にあてがう。それから、恵はゆつくりと体重をかけていった。

「あ……入っちゃう」

声をあげたのは勇希のほうであった。ヌメるものがペニスの先端から徐々に包みこんでゆく。心地よい締めつけ。恵の重みが腰にのしかかってきたときには、勇希の陰茎は女教師の膣にすっぽりと覆われていた。

「いっぱいだわ。オチン×ンがオマ×コのなかでビクビクしてる」

大きく息をつき、恵はまた淫らな台詞^{せりふ}を吐いた。腰を持ちあげ、座りこむ。温かな締めつけが勃起をこする。絡みつく肉壁が得も言われぬ快さを生みだし、勇希は目を



閉じてそれを味わった。初めて味わう女のなかは、極上というほかなかつた。

「気持ちいい？」

色っぽい声で問われても、うなずくので精いっぱい。

「ひさしぶり……やっぱりナマのオチン×ンっていいわあ」

ここにきてようやく、そうか、恵先生は処女じゃなかつたんだなと勇希は思った。彼女のファンの男子生徒たちが、その上品で清楚せいそな物腰から、

「恵先生って、絶対に男を知らないよな」

なんて噂し合っていたのを思いだす。この姿を見たら、度肝を抜かれるに違いない。(つていうか、僕、あいつらに殺されるかも)

みんなの憧れの的の先生と初体験できたことが誇らしく、それが快感にいつそうの拍車をかけた。

「もつと気持ちよくしてあげる」

恵は身体を前に倒し、勇希にかぶさるようにして両手をわきにつくと、腰を上下に動かしはじめた。

「あ、あう、あア——」

思わず声が出てしまう。締めつけがさつきよりきつくなった。包みこむものがペニ

スをこすりあげ、その部分からチュ、クチャツと、湿った音がこぼれた。恵の息づかいも激しくなる。

「先生のオマ×コ、気持ちいい？」

答える代わりに、勇希は自らも腰を突きあげた。さらに深い結合を求めての、無意識の動作であった。

「あん、はうん」

恵も可愛らしく、それでいて淫らな喘ぎをこぼした。ぎくしゃくしていた互いの動きがやがて同調し、快感が高まる。

「あん、あん、ああん、はん、あう——」

恵のよがりが大きくなる。ベッドもギシギシと軋み、階下の葉子たちにも聞こえるのではないかと心配になった。だからといって、やめようなどとは少しも思わなかった。こんな気持ちいいこと、そう簡単にストップできるはずがない。

鼠蹊部そけいがぶつかり合い、濡れた地面を踏むような音がした。その一帯も濡れているのがわかる。夏の夜。たちまち全身が汗ばんでくる。

（これがセックスなんだ——）

性器を繋げているだけなのに、肉体の蕩けとろ合う一体感を覚える。目の前でゆさゆさ

と揺れる乳房を見てみると、催眠状態に陥ってしまいそう。

「先生……もう、ダメ。イッちゃう」

たちまち限界を迎え、勇希は甘えた声を出した。

「もうなの？」

困ったふうに言われるのは、やはり恥ずかしかった。でも、いくら堪えようと思っても、ペニスの根元の溶岩は、爆発への秒読みをはじめている。

「初めてだからしようがないか。いいわよ、イッても」

恵は天井を見あげてちよつと考えてから、

「このままオマ×コのなかに出しちゃっていいから」

排卵期を計算したのだから、そう告げてから膣の締めつけを強くした。腰の動きにも、恥丘をこすりつけるような前後の動作を加える。

「あつ、あつ、イッちゃう、出る——」

自分の意志とは関係なく全身が暴れ、勇希は先生のなかに快美の放出を遂げた。ドクツ、ドクンツと、何度にも分けて。

「あくう——ン、すてき……」

恵も腰をわななかせ、悩ましい吐息をこぼした。